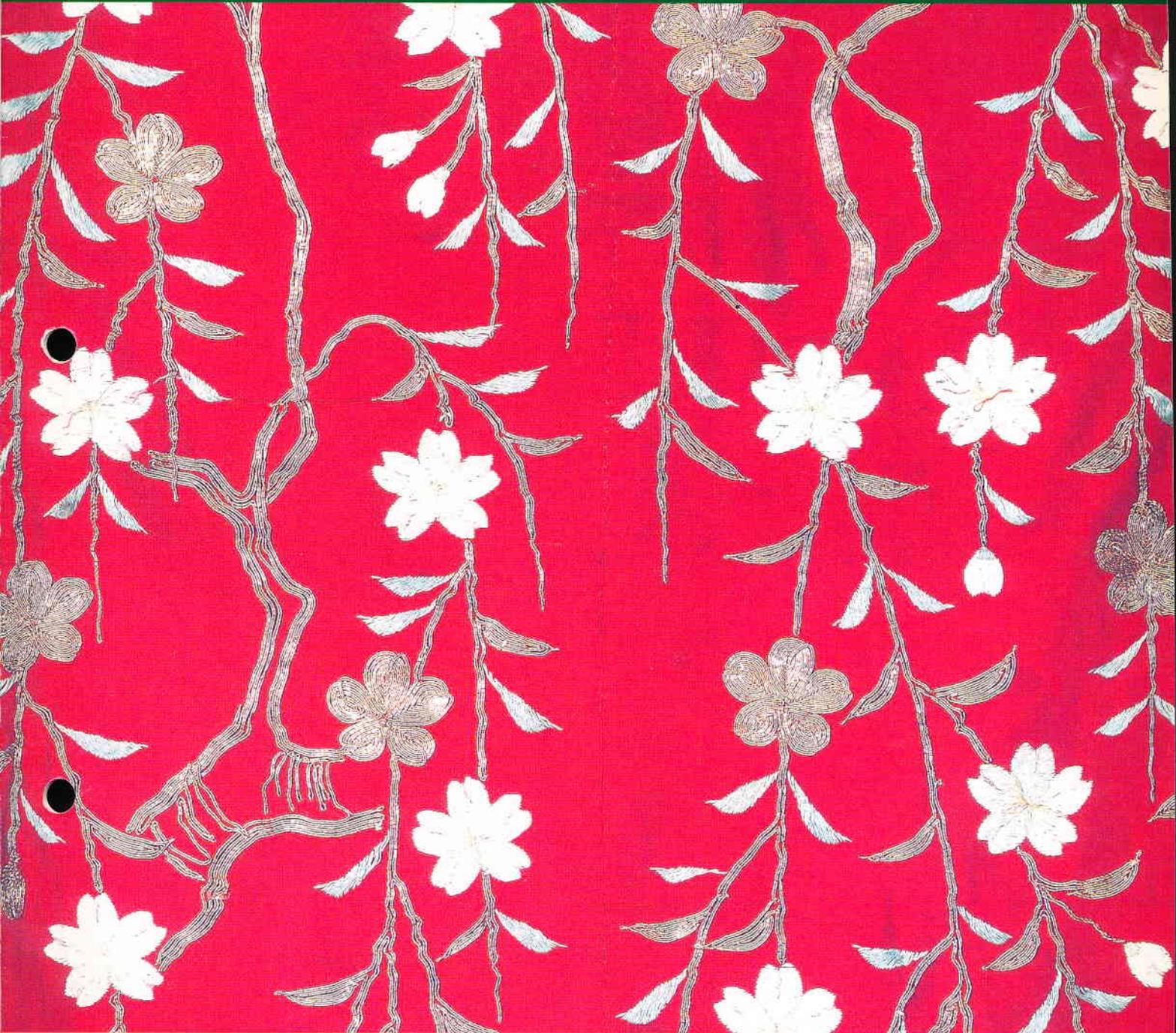


可児郷土歴史館だより

NO.16
2000.9.27
可児郷土歴史館



美濃の地歌舞伎衣裳②「うちかけ」展を開催

平成12年9月27日(水)～11月12日(日)

〈前期9/27～10/15、後期10/17～11/12〉

日本三大地歌舞伎(村芝居、農村歌舞伎)の一つの地として盛隆を極めた美濃の地歌舞伎。美濃の地歌舞伎は、中山道沿いで江戸時代末期を中心に、地域の祭礼などと結びつき盛んに演じられていました。村の若者が主体となって演じていた芝居の類には、狂言、人形浄瑠璃、農村歌舞伎などがあり、近年では後者を地歌舞伎とも呼んでいます。

可児でも、いろいろな記録や貸衣裳屋「山形屋」の存在、広く貸し出されていた豪華な衣裳などが往時の様子を物語ります。

今回の美濃の地歌舞伎衣裳②「うちかけ」展では、その中でも特に豪奢で、観客や役者をも魅了する裃(うちかけ)を中心に、ご紹介しましょう。



昭和27年の舞台風景
(個人提供)

I 「うちかけ」とは

裃(うちかけ)は歌舞伎の中では、主に傾城(花魁・おいらん)の役衣裳や、時代物で身分の高い女性が屋内で着用する衣裳です。帯を締めた上から羽織るように着ます。

もともと裃は、室町時代の武家が表着として羽織っていた、小袖から発展したものだとされています。それが江戸時代には武家女性の正装となりました。一方、庶民生活の中では、「悪所の美」として盛隆を極めた傾城(花魁)の衣裳として裃が繁栄しました。その後、双方が競うようにして豪華さを増していきます。

裃は着物としても特徴があります。例えば、身八ツ口(袖と身ごろの接する脇の部分)が閉じている、裾(すそ)はヒトツブキ、一番外側に着る着物のため装飾が華美である、などが挙げられます。その他にも、歌舞伎の衣裳として舞台上で見栄えのするよう、袴(ふき)に大量の綿を詰めて大きく見せたり、背面を重視したデザインをし、金糸をふんだんに使用するなど、様々な意匠が凝らされています。

このような奢侈な衣裳は普段庶民が着ることができないため、地歌舞伎では人々の羨望の的でした。そのため、裃を着たいがために役を争ったり、役者に抜擢されるとその家で好みの衣裳を仕立てたりする程、熱を入れ、執心していたようです。

Ⅱ 時代物にみるうちかけ

歌舞伎の芸題は、大きく時代物・世話物・お家物の3つに分類されます。地歌舞伎では時代物、お家物といった公家や武家の社会を扱った芸題が多く上演されていました。それには、「臣に忠、親に孝」という江戸幕府の政治的意図の反映、衣裳美への庶民のあこがれ、といった面があったようです。

時代物の裃は、目を見張る程の奢侈性の他にも、大きな意味を含むことがあります。「太閤記十段目」操、「実録先代萩」政岡などには、文様に深い意味が込められています。



濃紺縞子地金繡流水に薪散文

(のうこんしゅすじきんしゅうながれみずにかきちらしもん)

この裃には、金糸で薪と流れる水を随所にあしらひデザインされています。また、濃紺色の地に金糸、フキと袖口の緋色、と大変目を引く色使いがなされています。

華やかさを競い見せるために金糸がしばしば使用されています。金糸はどれも1本の金糸を折り返して縫い付けてあり、繋がっています。金糸とは、撚りのない糸を何本か芯にして、金箔を貼付した和紙で巻いてあるものです。芯にする糸の本数によって、「〇本通し」の金糸と呼称されます。この通しの本数により、力強さから繊細さまで多彩な表現が可能となります。

黒緞子麻の葉蝶地文金繡藤棚唐草文

(くろどんすあさのはちょうじもんじきんしゅうふじだなからくさもん)

黒地に藤棚と唐草が細い金糸で描かれ、すっきりとした品のある裃です。細い金糸と程よい余白が品格を高めます。

時代物に登場するお局でも、若く、位の高い者の役柄に使用されたと考えられます。



黒緇子地金繡雪持竹に南天文

(くろしゅすじきんしゅうゆきもちたけになんてんもん)

黒地に雪に竹、南天が描かれた裃は、「実録先代萩(じつろくせんだいはぎ)」に登場する乳母政岡(浅岡ともいう)の役衣裳です。

「実録先代萩」は、仁木弾正と妹八汐が若君鶴千代の命とその乳母政岡の失脚をねらう芸題です。「御殿の場」では、八汐がすすめた毒入り菓子のもとで、政岡の子千松が殺されます。政岡は我が子の死にじっと耐え、若君鶴千代を守ります。政岡が裃で鶴千代を隠し、見せ場を盛り上げます。

時代物における裃は、室内で羽織る着物という以上に、演目の中でその人物の人柄や家柄を表わしたり、所作においても重要な役割を果たしています。

この裃は、竹を太く多くし、南天を入れて、一層映えるようにデザインされています。



黒緇子地金繡竹に雀文

(くろしゅすじきんしゅうたけにすずめもん) 江戸時代末期

所蔵:美濃歌舞伎博物館

この裃も、「実録先代萩」政岡の役衣裳です。

本来、政岡の決まり衣裳は、竹に雀が飛んでいるデザインです。この芸題のモデルとなった仙台伊達家の家紋にちなんだ文様で、政岡の役を象徴しています。

それを基本としながらも、役者の好みや豪華志向によって文様がさまざまにアレンジされます。雀を多くしたり、南天を加えたり、竹を増やしたりします。この裃は、ずっと伸びた竹に雀が飛び交っています。前掲の裃は、竹の本数を増やし南天を入れ、雀を省いています。



深緑地錦雲丸龍鳳凰文

(ふかみどりじにしきくもまるりゅうほうおうもん)

時代物に登場する高位で、比較的年齢の高い大奥女性の役柄に使われた裃です。

高位を示す龍と鳳凰の文様が使われています。

時代物の裃は通常、未婚者には刺繍柄、既婚者には錦の裃を用います。





紫地錦丸龍花菱文

(むらさきじにしきまるりゅうはなびしもん)

時代物に登場する位の高い大奥女性、の裃です。

錦の着物は、江戸時代後期には、武家の中でも上位の人々のみしか着用できない高価な着物でした。また、紫色も古来より高貴な身分の色とされ、江戸時代でも染料が高価なことから庶民の着用が禁じられていました。庶民ばかりでなく、武家に対しても贅沢を禁止する定が発令され、厳しく取り締まりを受けた時代でした。その様な時勢に、歌舞伎はその反骨精神や日常から脱却した世界を創るために、禁止されている衣裳をも使用し、庶民の心を引き付けていました。

朱色縮緬地金繡枝垂桜文

(しゅいろちりめんじきんしゅうしだれざくらもん)

「本朝廿四考(ほんちょうにじゅうしこう)」に登場する八重垣姫の役衣裳です。

「本朝廿四考」は、序段、二段目、三段目(筈)、四段目(十種香、狐火)から成ります。「十種香」、「狐火」では、深窓の姫・八重垣姫が恋の情熱を燃やし、恋人武田勝頼の命を救います。

姫の衣裳に多くみられる桜が、金糸を用いて衣裳の全面に表現されています。袖にも気を抜かない縫い付けがしてあり、前から見ても後からみても、豪華な裃です。

さらに、丸髷(まるまげ)を結び、吹輪(ふきわ)や銀の花櫛(はなぐし)を刺し、とてもきらびやかな世界を創出します。



朱色羅紗地金繡扇面散文

(しゅいろらしゃじきんしゅうせんめんちらしもん)

若い姫の役に使用されます。朱色の鮮やかな地色と大胆に扇面を散らした華やかな意匠は、舞台上で観客を魅了します。

姫君役は赤地の衣裳を着ることが多いため、「赤姫」とも呼ばれます。特に代表的な「本朝廿四考」八重垣姫、「金閣寺」雪姫、「鎌倉三代記」時姫は、三姫といわれています。金糸銀糸で花文様や雲形、流水の刺繍がしてあり、姫の華やぎと気品が一層際立ちます。

金糸の刺繍は、別の台に縫い付けた後、衣裳に切付けます。これを台付(だいつけ)と呼びます。扇面は立体感を出すために、中に厚紙を挟んだり、幾重にも金糸を重ねて密に縫い付けてあり、衣裳自体が重くなります。重さに耐えきれず、月日が経つと地布が破れてしまう程です。



納戸縹子地金繡流水に紅葉槌文 ☆

(なんどしゆすじきんしゅうながれみずにこうようつちもん)

所蔵: 藤岡町教育委員会

鮮やかな納戸地に金、紅葉と袴の赤が見事なコントラストを創出しています。裨褙を一つのキャンパスに見立て、自在に意匠を凝らします。

この裨褙は、時代物に登場する高貴で若い女性の役柄が着用したのでしょうか。

白綸子地金繡葡萄棚文 ★

(しろりんずじきんしゅうぶどうだなもん)

所蔵: 藤岡町教育委員会

白綸子の地にも葡萄の絵が織り込まれ、更に、金糸で葡萄棚が細工された凝ったデザインになっています。藤棚の菱形格子に色とりどりの葡萄の房を規則的に入れた配置も見事です。

白地の裨褙は他に、桜、藤、朝顔などの草花の柄があります。



紫色地松竹梅に雲鶴文錦

(むらいろじしょうちくばいにうんかくもんにしき)

時代物に登場する大奥女性の中でも、年を召した者の裨褙です。例えば、「太閤記十段目」の皐月が該当します。

年齢に見合った落ち着いた色が選ばれます。色は地味でも、地の文様として吉祥柄を織り込み、細かなところで気遣いを見せています。

かつらは、白髪の手髪に婆帽子をかぶります。

III 傾城を彩る衣裳たち

傾城、すなわち花魁役が着る裃は、豪華絢爛、権勢を誇示する意味が込められています。裃、俎帯ともに、傾城の地位の高さや権勢を誇り、旦那の権力や財力を誇示する衣裳として、比類のないほど贅沢なつくりになっています。

背面を中心としたデザインがなされ、「そり返り」の所作では裃を大きく観客に魅せます。



昭和20年頃の様子
「曾我対面」
(個人提供)



黒天鷲絨地金繡牡丹唐獅子文

(くろびろーどじきんしゅうぼたんからじしもん)



明治時代中期

所蔵:美濃歌舞伎博物館

「寿曾我対面(ことぶきそがのたいめん)」の虎御前、「助六縁江戸桜(すけろくゆかりのえどざくら)」の揚巻などが着用する裃です。

大きく力強い唐獅子が牡丹に栄え、一層華やいて見えます。揚巻は、めでたい文様の衣裳で身を飾ります。

またビロードは、明治時代以降には技術も発達し量産されるようになりましたが、それ以前は、中国から輸入していた大変高価で、かつ入手困難な生地でした。

浅葱糯子地金繡宝船に鶴文

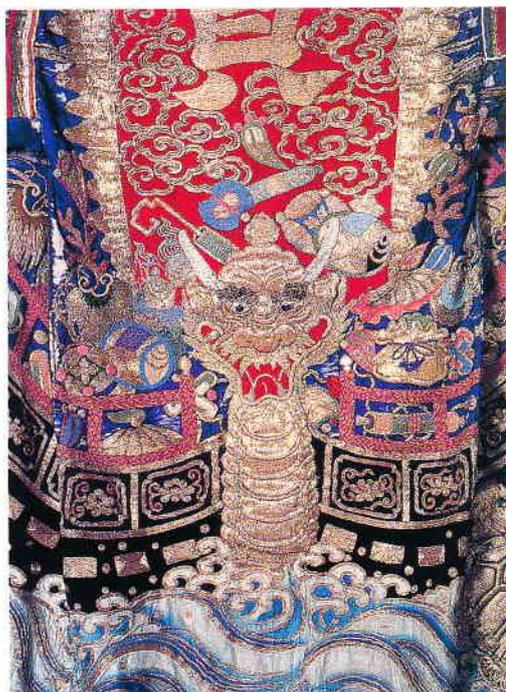
(あさぎしゅすじきんしゅうたからぶねにつるもん)

☆

所蔵:藤岡町教育委員会

地色の浅葱が波と空を連想させ、金糸の照り返しが大変鮮やかに映えます。

袴にも素晴らしい布が使用され、他にも増して厚く綿が込めてあります。裨褙の引きずるという使用形態から、袴は何度も付け替えられることがあります。



濃紫糯子地天鷲絨地金繡波に宝船文

(のうししゅすじびろーどじきんしゅうなみにたからぶねもん)

同じモチーフでも、製作者の好みや役者の注文で、様々にアレンジされます。前掲の裨褙には、金銀の鶴が舞い、波間から珊瑚が見えます。袴も綿が大量に詰められ、重厚感を増しています。こちらの裨褙には、鶴はいませんが亀が泳ぎ、七宝が大きく描かれています。どちらも吉祥文に仕上がっています。

見ごろと袖の付け根に、縦に帯状の布があります。使用頻度が高く、破れたところに、おめでたい色づかいを配慮して補修がなされています。





黒羽二重地桐に鳳凰文 友禅

(くろはぶたえじきりにほうおうもん ゆうぜん)

大正時代中期

所蔵:美濃歌舞伎博物館

染の裃は、傾城がお得意様への年始廻りをする際に着用した衣裳です。年始にふさわしく、おめでたづくしの柄行になっています。

実際、傾城はこうした染の着物を着、両袂を持って年始廻りをしていました。

両袂を揃えて持つため、両袂付近の前身ごろは左右柄が揃っています。これも、傾城の裃の特徴です。

藤色羽二重地波に松竹梅文

(ふじいろはぶたえじなみにしょうちくばいもん)

明治時代末期

所蔵:美濃歌舞伎博物館

傾城が年始廻りに着用する染の裃です。おめでたづくしの柄には、松竹梅があしらわれています。

袂先の上まで見事に松が伸びており、松間にみえる梅が小粋に光ります。上下に配された金繡の牡丹も鮮やかです。また、柄は蠟纈染めです。



IV 傾城を彩る俎帯

俎帯とは

傾城が着付の上に前向きに結ぶ帯のことを、「俎帯(まないたおび)」といいます。裃はこの上に羽織ります。裃が魅せる背面の装飾だけでなく、前面も俎帯を広く結ぶことによって、より一層豪奢性・優美性を際立たせます。文様も金糸を使った派手なものが多く、傾城の格や旦那の権勢をより強調するものとなっています。

黒天鷲絨(縺子)地金繡雲に龍文 俎帯

(くろびろーど(しゅす)じきんしゅうくもにりゅうもん)

明治時代初期

所蔵:美濃歌舞伎博物館



元来、天鷲絨の俎帯でしたが、破損がひどくなったため、龍文の周囲を切り抜き、縺子地で仕立てた俎帯に台付のように縫い付けたものと思われます。

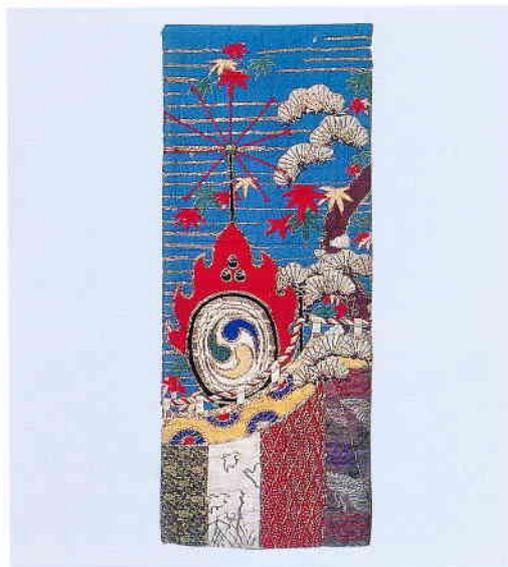
雲に龍のデザインは、俎帯に限らず四天、着付など豪華勇壮なデザインとして広く使用されています。

浅葱地松紅葉火炎太鼓に幔幕文 俎帯

(あさぎじまつこうようかえんだいこにまんまくもん)

黒地の帯が多いなか、青地が秋の澄んだ空を連想させ、効果的に使われています。火炎太鼓や幔幕、松など、全て金糸でふちどりされています。

裏面にも刺繍が施されており、動いた時に下からちらりと見せる贅沢を楽しんでいます。



黒天鷲絨地金繡鷹に岩波文 俎帯 ☆

(くろびろーどじきんしゅうたかにいわなみもん)

金糸を幾重にも重ね、立体的に表現した鷹を中央に配したデザインは、迫力を伝えています。

また、より豪華に見せて舞台栄えするよう、帯全体に綿が厚く入れられているのも、俎帯に工夫された特徴のひとつです。





黒縹子地金繡富士山に雲龍蝶文 俎帯★ (くろしゆすじきんしゅうふじさんにうんりゅうちょうもん)

所蔵:藤岡町教育委員会

「寿曾我対面 工藤祐経館段(ことぶきそがのたいめん くどうすけつねやかたのだん)」化粧坂少将の役に使用されました。

この段は、化粧坂少将、虎御前、舞鶴という3人の女形が揃い踏みする、大変絢爛とした場面です。

蝶は後付け。定型文様である曾我十郎の千鳥文様、曾我五郎の胡蝶文様に因んで、補修の際に工夫されたものかもしれません。補修は単にほつれを目立たなくするだけでなく、ユーモアとアイデアいっぱい工夫され、この様に補修の度ごとに絵柄が変化していくこともありました。

V 装飾美の世界

地歌舞伎の衣裳は、それのみでも絢爛たるものですが、かつらやかんざし、小道具といったものものが一層際立たせてくれます。傾城の髪型「揚巻」や「兵庫」には、鼈甲のかんざしやくしを何本も差し、姫の髪型「丸髷(まるまげ)」には銀の花ぐしや花かんざし、吹輪(ふきわ)など、色とりどりに飾ります。

衣裳自体もまた、使用するたびに次第に豪華になっていく場合があります。互いに衣裳の華美を競い、「もっと台付を付きたい。もっと刺繍を増やしたい。」と、元の衣裳に様々な手を加えていきます。

江戸時代末期より親しまれてきた地歌舞伎は、非日常の世界であり、庶民のあこがれを表現できる数少ない場でありました。そうした中で、豪華な衣裳に向けられた羨望の眼差しを、これらの資料から窺うことができるのです。



台付



簪・笄など
かんざし こうがい

謝辞

本展覧会を開催するにあたり、ご指導、ご助言をいただくとともに、貴重な資料の出品をご快諾いただきました下記の皆様方に厚く御礼申し上げます。(順不同)

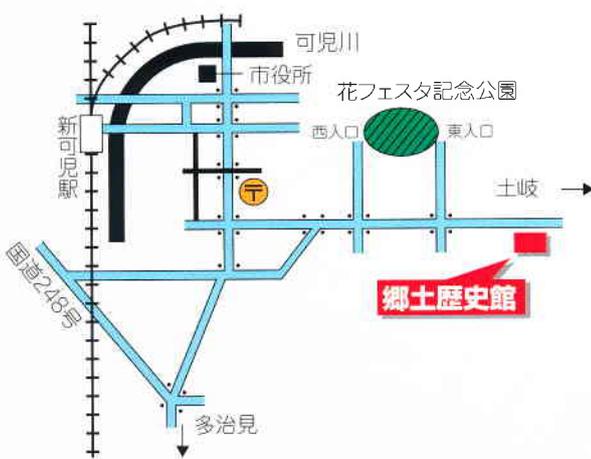
小栗 幸江 様	美濃歌舞伎博物館「相生座」 様
小沢 敷雄 様	藤岡町教育委員会 様
各務 和子 様	
柘植 千津枝 様	
前田 延枝 様	

§ 参考文献

- ・小栗克介編『美濃の地歌舞伎』(1999・8、岐阜新聞社出版局)
- ・下中邦彦編『歌舞伎事典』(1983・11、平凡社)
- ・博物館明治村編『地芝居の衣裳—歌舞伎の奇想デザイン—』(1992・3、名古屋鉄道株式会社)
- ・福島県立美術館編『歌舞伎の衣裳』展図録(1995・9、福島県美術館)
- ・藤岡町教育委員会編『藤岡の歌舞伎と歌舞伎衣裳』(1990・3、藤岡町教育委員会)
- ・「裃の成立」(ミュージアム中仙道企画展「地歌舞伎の衣裳展」1999・1)

附記

- ・☆…前期のみ展示 ★…後期のみ展示 印なきものは前後期展示
- ・特に所蔵を明記しなかったものは、平成10年に武藤辰夫氏(菅刈)より寄贈を受けたものであり、館蔵品です。概ね江戸時代末期を中心とした時期の作と考えられます。



利用案内

休館日 月曜日・祝日の翌日
開館時間 午前9時～午後4時30分
入館料 大人310円、小人70円

可児郷土歴史館

可児市久々利1644-1
電話 0574-64-0211

◆展示説明会

10月28日(土)午後1時30分より

講師：美濃歌舞伎博物館「相生座」 小栗 幸江 館長